

先生の誠は慈母の如くに

児 玉 富美子

武田ミキ先生の突然の訃報に接しましたのは、昨年十二月二十八日の事でした。ここ暫く心にもなきご無沙汰を重ねていることを心苦しく感じておりました矢先だけにほんとうにびっくりしてしまいました。

わが身周辺の次々の行事に追いまくられ、ご入院なされし時期さえも覚つかなき失礼を悔やまれることしきり、何はともあれ私は、わが家の佛壇にお燈明を上げさせて頂きました。

「先生！お見舞にも行かなくて、そして誠の心を抱きながら」と、一心にお詫びや感謝の気持をいっばいにご冥福を祈らせていただきました。じっと目を閉じれば、ベッドの上での逞しい陣頭指揮や、一番苦しい時代だった高校設立前のファイト溢れるお姿などご不自由なお体でお立台での訓示などと、走馬灯のようにありし日の懐かしいお顔が蘇ってまいりました。

思えば広島県可部女子専門学校時代に洋裁教師として赴任させていただいたのは、昭和三十年四月のことでした。満二か年の短い歳月ではございましたが、私の一生を通じてこの間に受けた育心の数々の感銘と、御自ら身を投じて教示下さった厳しい生活の一つ一つは、今なお私の脳裏に忘れ難い貴重な存在となつて役立っているのです。

その当時の私にとってそれはそれは驚異的感激そのものだったのでございます。

既にその当時の教育内容や感動の想い出は、武田学園創立三十五周年記念誌に掲載させて頂いておりますので重複は避けたいと存じますが、ミキ先生の厳しい中にも慈愛溢れるお人柄は忘れません。ある時、そっと私をお呼びになり「先生、こちらは私立だから貴女の前任校の公立（廃校になった）より給料が安いが我慢して下さいネ。その内、生徒数も増えたらネ」と。私は当時三十一才余り、戦争未亡人として子供が幼いまま里へ籍を戻して頂き、里の父の世話をしながら結構すねかじりもして案外気まじめに務め一筋に生きておりました。そんな私にミキ先生は、自分でさえも考えたこともない私の将来の細かい経済設計までひそかにご考慮下さつていて「三十代という時代は教師として最も適任の時、ぜひとも此處に永く」と涙の出るような温かいお言葉をいただいたのでございます。ほんとうに心の中で泣いてしまいました。

その後、再婚の話などもあり、一応退職をさせていただきましたが、結局一人での人生を選び茶華道に身を転じ今に至っておりますが、その後も再度復職のお言葉をおかけ下さるなど、まさに慈母の如くのミキ先生でした。

また、あの時は夏休みだったでしょうか？七・八名の女子職員に、「ポーナスはあまり出せないからせて、常石の里でゆっくり遊んで帰って下さい」と手配下さつており、現学長先生の沼隈のご立派なご自宅に招待され、そ

二、教育一途の人

れこそ私共は素直に四、五日をわがままに寝泊りさせていただきました。

朝、昼、晩の食事はお心こもる恵美子夫人の手料理で、上げ膳据膳のありがたさ、その腕前の素晴らしさに舌づつみしたことは今でも感謝いたしております。

また、お多忙の中を、学千先生にはお舟で頼ノ浦や近くの島へ海水浴に、そして大きな船で遠く四国の琴平詣でまで、ほんとうに忘れることの出来ない勿体ない旅を味わせて貰ったものでございます。

ミキ先生!!ほんとうに有難うございました。只今、わが家の茶室に先生の遺墨「誠」の色紙を掲げさせていただきますました。

「教育に生き教育に死する」の信念に九十二年の永い生涯を安らかにお閉じになった先生の心の誠が、ひしひしとわが胸に伝わってまいります。まさに先生の教えは立派に花開いて多くの門弟の心の糧となっているのでございます。どうぞ、あの世からもしつかり、お護り下さいますように、先生のお別れの車がしずかにしずかに白亜の学舎をひと巡りして消えていききました。

女性の鑑、教育の鑑、偉大なる武田ミキ先生のご遺徳は、燦然と輝いて、いついつまでも光り続けることだと思いますしやう。

心から先生のご冥福を祈りつつ思い出ずるままに合掌。